
妖争

ossan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖争

【Nコード】

N3322F

【作者名】

Ossan

【あらすじ】

黒妖と呼ばれる悪しき妖にすべてを奪われた主、二度と同じ過ちを繰り返さぬよう、幾度となく赤き花を散らす。けっこうシリアス。主を慕う妖たちがそれぞれに想い奮闘します。 <毎日、更新予定…のほず>

壱

人間の主、妖の僕。しもへ

黒妖こくまようと呼ばれる悪しき妖にすべてを奪われた主、二度と同じ過ちを繰り返さぬよう、幾度となく赤き花を散らす。

さつきまで降っていた雨の所為でできた水溜りに、落ちてきたしずくが波紋をつくる。

「北の領主が暴れていると小耳に挟んだ。・・・でるぞ」

西の領主であり妖達の主である男、竜沃りゅうわくがそう言つとさつきまでの静寂が急に破られた。

黒妖を捕らえる理由は人それぞれ。妖を引き連れる者もまたそれぞれであり、その者を主とする妖たちを含めそれを人は鬼と呼ぶ。鬼は、東西南北に別れ、領地をとる。しかし、黒妖を殺し楽しんでる者がいるのもまた事実。その力が、北を跳び越し西にまで及んでいる。

「主よ、いかなさるおつもりか」

「もはや話し合いでは解決すまい。潰すほかないだろう」

竜沃の言葉に、神妙に頷く妖達。

そして、竜沃を中心とする鬼が動き出した。彼をひきいる鬼は、北の領主の暴れる大地へと百鬼夜行のごとく向かって行く。

しかし、妖達の一番後ろに図体のでかい妖がのろのろと歩いてついてきている。

「主、このままでは夜が明ける」

「・・・あいつは置いてくるべきだったか」

心なしか額に手をやり落ち込んでいる主を慰めるように、人のなり

をした妖が小さく言った。

「先に行つて確かめて来ようと思うのだが、許可をいただけるか」

「ああ、悪いがそうしてくれ」

竜沃がそういうと、隣にいた妖は風のごとく去つていった。それを認めた竜沃達はぴたりと歩みを止め、いまだにこい夜の気配に身を隠した。そうして数分がたち、ふつと竜沃が顔を上げた。

「もしか無駄足だったかも知れぬ」

空を見上げ彼がそうつぶやくと、先ほど様子を見に行つた妖が戻ってきた。

そして竜沃に近づき、ひざをついて言った。

「どうやら遅かったようで」

竜沃はやはりそうかという顔をしたあと、スクッと立ち上がり口を開く。

「ご苦労だったな。戻るぞ、朝の来ぬうちに」

彼がそういうと、妖達は身を翻しやはり百鬼夜行のごとく屋敷へ帰つていった。

鬼とて、まともな仕事の一つもせねば食ってはいけぬ。

竜沃は、いわば陰陽師のような仕事をしている。風邪が治らぬだの何だのと、妖が関連しているものがほとんどだ。

仕事のほとんどは、それを追い払うだけのこと。普段から、鬼として行動している竜沃りゅういにとってはいたって簡単で、なおかつ大金が入るいい仕事だ。

はて、今回の依頼の紙はどこへ置いたかと竜沃が蔵を見に行くと、いつもは酒を控えているはずの妖が酒を飲んでいるではないか。妖といっても、彼の目の前にいるのは背が高く髪の長い男だが。

「夜七やしち、何かあったのか」

大体の予想はついていているものの、少しばかりちよっかいをかけてみようかという気になり声をかける。

「気が向いたんで、少し」

「ほー。お前は気が向いただけで控えていた酒を飲むような軽い男だったか」

「・・・ほー。主は分かっていますちよっかいをかけるような嫌な男でしたか」

「まあ、そんなもんだな」

嫌そうな顔をしてだが、ちゃんと返してくれた妖に少し安心しながら、とところで話題を変えた。

「今回の依頼の紙を見かけなかったか」

「主の言っているのはこれのことか」

妖は、手にした紙をひらりと振って見せた。竜沃がそれだという顔をすると、スツと手渡した。

「・・・どうする、お前も来るか」

「いや、今回は遠慮させてもらいたいのだが」

竜沃はそうかとだけ返して蔵から出て行った。彼が去った後、妖は

小さく呟いた。

「主は心配性だな」

その頃竜沃は、妖達を引き連れて門を出るところだった。その前に、大きめの妖達だけ屋敷に残るようという指示を出してからだが。そうして、ようやく暖かくなってきた道をできるだけ妖を隠しながら歩き依頼者のもとへと向かう。

依頼された家に着くと、何やら妙に不穏な空気が流れている。不吉な予感を感じながらも、もう来てしまったから仕方ないという思いにまかせ中に入った。廊下を進む足取りが重い。辺りを見回しながら、竜沃は一人呟いた。

「やはりまともなのを一人連れてくるべきだったか」

それもそのはず、壁や畳の隙間にいるわいるわ、黒妖こくようのなりそこないがうじゃうじゃと。

眉間にしわを寄せどうしたものかと考えていると、この家の主人らしき人物がやってきた。これだけいれば当たり前前といえは当たり前なのだが、主人は顔色が悪い。

「いやあ、わざわざ悪いですね。よろしくお願ひします」

「いえ、ご心配なく。・・申し訳ないのですが、しばらく離れていただくると助かります」

竜沃がそう言うと、主人はわかりましたといって戻っていった。

「さて、どうしようかねえ」

主人がいなくなった部屋に、妖達がひろがった。そして、いったいどうしたものかとざわめき始める。

すると突然、竜沃の目の前を黒い何か横切った。

「ほう。」

しばらくの沈黙の後、彼は目を細めてつぶやいた。その後、クルリと後ろを向き妖たちに向かって口を開いた。

「一つ目、少し頼みがある」

彼がそういうと、一つ目は嬉しそうにうなずいた。

一つ目にとっては久しぶりの頼みなのだから、無理はないのだが。

「悪いな。……ついて来い」

竜沃はそう言つて、先ほどの黒い影の走り去つたほうへ歩いていく。もちろん、一つ目も後ろをピヨピヨこつついていく。

しかし、さつき黒い影が入つていったらう壁の隙間には何の影も見えない。キヨロキヨロと辺りを見回すも、見えるのは小さく醜いなりそこないのみだ。竜沃は小さくため息をつき、足元にいた黒妖に低く言い放つ。

「主はどこにいる。西の鬼が呼んでいると伝える」

黒妖は慌ててどこかへと走つていった。そして暫くすると、目の前に先ほど見かけた黒い影があらわれ低く恐ろしい声が部屋に響いた。

「おお、知っている顔だと思えば、西の鬼か」

「先ほど伝えさせたはずだ」

「……お前の言いたいことはわかつておる。この家の主はわしの住処を汚した。そう簡単に動く気はない」

黒妖は渋い顔で口を開いた。だが、もともとそう言われるのは覚悟していたため、竜沃は怯むことなく言い返す。

「……どうだろう、この一つ目が新しい住処に案内する。そこそこ良い場所のはずだ。俺に免じて許してはもらえぬか」

黒妖は一瞬ピタリと止まつた後、竜沃を見据えて低く唸るような声で言う。

「それは、動かぬなら手を出すこともあるやもということか」

「そうとつてもらつても構わない」

暫くの沈黙。重い空気を破つたのは黒妖だった。

「……わかつた、引き下がろう」

渋々といった感じで、さつきよりもいくらか不機嫌な声色だった。しかし、それに怯むことなく悪いなと返して話を打ち切る。

そのまま一つ目に道案内をまかせ、竜沃達は屋敷へと歸つていった。「主、あれで引き下がらなかつたらどうなさるおつもりだった。まさか、逃げるつもりではあるまい」

歸る途中、妖からこのような質問がされた。

「いや、全力で逃げる」

横にいた雷獣らいじゆうにそういうと、苦笑しながらもこう返された。

「主がそのようでは、少々困る」

もちろん、雷獣といえど姿が目立つため人の姿をとっているが。

そんな他愛ない会話をしていると、横を通り過ぎていく男が耳元で小さく囁いた。

「今夜、北の領主が動くようです」

情報屋だ。軽く頷いて通り過ぎる。

いくら鬼とはいっても、相手の動きを知ることが難しい。そのため、鬼には最低一人は情報屋が雇われているのだ。

家に帰り門をくぐると、夜七が待っていた。

「主、今夜は忙しくなるようです。良ければお供いたします」

「それはまた、心強いな。今回の依頼も、お前が来ていれば楽だったのだがな」

お互い皮肉を言っているものの、目は笑っている。竜沃は、何かを思い出したように後ろにいた女に言った。

「それはそうと、雨女あめおんな。今夜は雨を降らしておけ。」

「どれほど」

「人が外に出ない程度に。今夜は危ない」

「承知いたしました」

目を細め、昇り始めた月を見ながら準備にかかる。妖達は、いつもよりも心なしに緊張した様子で主の前に集まっていく。

「青坊主、お前はここを守れ」

体のでかい青坊主は家に残り、激しく打ちつける雨の中昨日向かった地へ再び足を向ける。

聞こえるのは、黒妖の悲痛な叫び声。竜沃は一瞬ためらった。それでも足を進めた彼の目に飛び込んだのは、冷たく輝く赤き光。否、見えるのは人と黒妖の血の海。

竜沃はもちろん、妖達までもが息を呑んだ。

「お前等、雑魚はまかせた」

一瞬の沈黙の後、意を決したように竜沃が走り出した。それを合図に、妖達も動き出す。

「承知いたしました」

妖達は、周りにいた黒妖を押さえにかかった。足元に溜まった血が足を進めるたびに服にはねる。嫌気が差してくるが、ここで引くわけにはいかない。

妖達の間に来た細い道を、彼は迷うことなく進んでいく。それほどの力を持っているわけでもないのか、すんなりと通ることができた。

そして、地をけり壁を踏みつけ高い塔の上に立つ北の領主のもとにたどり着く。

竜沃が、腰に差していた刀を彼に突きつける。しかし、竜沃はピタリと止まったまま決して動かない。暫くして、彼がようやく発した言葉は妖達をがっかりさせるものだった。

「・・・影武者か」

刀を首に突きつけられたまま、竜沃の前に立つ男は口を開いた。

「殺さぬのか」

質問というよりは、どこか決め付けたような言い方だった。ふと、背中に慣れた気配を感じる。

首に向けた刀はそのままに、近くに來た夜七に目を向ける。

「何故お分かりになられたのです？ 仮にも影武者、そう簡単には見破ることはできません」

夜七は影武者を睨めつけたまま、その場を動かないで聞いてきた。

「いや、昔奴が気に入らなくて刀を向けたことがあつてな。慌てて謝ってきたところを考えると、ありゃ一生直んねえな」

「主は小さいときから少々人間離れしていましたからね」

「いやに人間くさい主よりマシだろう」

「否定はいたしません」

そんな緊張した場に不釣合いな会話をしていると、雨女が上がってきた。そして、少し微笑みながらこう言った。

「小さい頃の主、見とっございました」

雨女がそう言うのと、夜七は何が面白いのか声をこらえながら腹を抱えて笑い出し、竜沃はそんな夜七を眉間にしわを寄せ見ていた。

雨女が小首を傾げて見ていると、ようやく笑いがおさまったのか、夜七は小さく息を吐き呼吸を整えて口を開いた。

「やめておけ、今より恐ろしかった」

「まあ、主に失礼ですよ」

すると、竜沃がそうだとばかりに口を開いた。

「せめて可愛かったとでも言っただけほしいものだ」

少し口を尖らせながら言う竜沃だが、夜七は飄々と主である彼の言葉を封じて見せた。

「刀を抜くと歯止めが利かなくて手のかかる主でした」

「・・・否定はせん」

刀の先に意識を集中したままそんな会話をしていると、そこから声をかけられた。

「楽しそうに話しているところ申し訳ないが、俺は帰らせてもらう」

影武者はそう言うのと、竜沃の傍にいた夜七を自分の妖に担がせ立ち去った。その間かかった時間はたったの五秒だ。

「あ」

傍にいたにもかかわらず、竜沃は何とも間抜けな声を上げた。だがその声にはどこか、何かを企んでいるような響きがあった。

妖に担がれている夜七も、何の抵抗もなくただされるがままにさらわれていく。

「何故抵抗せぬ、まさか計算のうちだったか？」

そんな影武者からの疑問にも、まったくもってそんな事はないといった風な口調でこう答えた。

「いや、特にそんな企みなど無い。百聞は一見にしかずと言うだろう、この目で北を見ておこうと思っただけだ」

去っていく影武者達の姿が、もう見えなくなつた。何故か楽しげに月を見上げる主に、妖はそっと打ち明ける。

「いつも思いますが、主と夜七はお互い勝手にやっているような感じがします」

「・・・信頼、というものだ。たぶんな」

信頼という言葉を口にした自分が、どこかおかしくて苦笑した。口に出したその言葉が妙に恥ずかしく、言葉を濁した。

確かに、竜沃と夜七はどちらかが攫われても囚われても特に気にする訳でもなかった。もちろん、考えただけで実際にそんな事が起こったのはこの日が初めてだが。そう思えば、実際あいつなら大丈夫だろうという思いがどこかにある気がしてならない。自分でも良くわからないその感情を、竜沃は信頼と称した。だが実は、妖が不信に思う以上に彼自身いつたいどうしたものかと頭を悩ませていた。何故か、不安な気持ちが無いのだ。どこか、信頼という言葉とはまた別に何か彼の中で静かに動き出したと言ったほうが近いのかもしれない。

血が騒ぐのだ。何せ、黒妖を倒すためにある鬼。また、その主だ。今までこんなにもわくわくとした気分浸ったことは無い。ただ、それが彼にとっては悩みの種。何故、今まで血が騒がなかった。今まで、うんざりするほど黒妖を見てきたのに何故、夜七が攫われた今この血が騒ぐ。倒すべきは黒妖のはず。

そして、彼はある結論に至った。思わず顔を覆いたくなるような結論だった。

「まさか・・・、な」

「・・・主？」

胡乱気に見つめてくる妖達の間を通り抜け、昼間向かった屋敷に走っていく。彼がたどり着いた結論は、最悪なものだった。

夜もじきに明ける。彼ら在必死に走っても屋敷に着いたのはもう、明るくなつてからだだった。もちろん、明るくなつたといつてもまだ早朝だ。

しかし、屋敷の女中が水を汲む音が聞こえてきた。

「朝早くすみません。少々不安がありましたもので、少し見て回ら

せてもらえませんか」

控えめに声をかけて、中に入れてもらう。昼間来たときとは違い、落ち着いた空気が辺りを包んでいる。

「主」

妖の呼び止める声が微かに耳に入る。その声に軽く手を上げて答え、足元に目を落とす。足元にあつたのは一枚の紙。ただそれは、黒い何かに包まれていた。溜息を吐いて、それを手に取る。

「なるほどな。やはり昼に逃がすべきではなかったか」
手に取った紙にはこう記されていた。

北の領主はもういない。北の領地を支配する者はこの瞬間よりわしへと変わる。

クルリと向きを変えて、屋敷へと向かう。もちろん、女中には異常は無かったと告げて。

しかし、道の途中で妖に檄を飛ばされた。

「何故助けに行かないのです、いったい何を考えておられるのですか。夜七の身の安全もお考えください！」

助けに行かぬ訳が無い。だが、特に遅れても何があるわけでもない。彼らは竜沃の怒りに触れるとどうなるか分かっているのだ。

いったい何故それが分からぬのか。溜息をつく、妖はさらに怒りをあらわにする。

「何故そんなに呑気にしていられるのです！主の考えが分かりませぬ！」

つまり、簡単に言えばついていけぬということだ。

「ならば勝手に意見でも言えばいい。ただし、俺はそれを聞かない。不満げな妖にそう告げると、唇をかんで眉間にしわを寄せたまま姿を消した。そのまま門をくぐり、妖達に休んでいると告げる。

この日は仕事も休みだ。部屋に入り、今後の動きを練ろうと座ると窓が開けられる。

「窓が玄関だと思わないでもらいたいのだがな」

「黙れ馬鹿。お前は言葉が足りんのだ」

窓から侵入し、屋敷の主である竜沃を馬鹿呼ばわりしたのは、彼の兄である彼方だ。

「兄上、可愛い弟を馬鹿呼ばわりか」

「どおーこが可愛いのかねえ。この馬鹿で何考えてるか分からん弟の」

兄の言葉から、先ほどのやり取りを見ていたことを悟る。

ふと、こんな時兄ならどうするだろうと思いつ。答えてもらえぬのは承知で、兄に疑問をぶつける。

「こついう場合どうするべきだと思つ」

彼方は、はたと竜沃の顔を見て笑顔で答える。

「らしくねえなあ。やりたいようにやりゃいいじゃねえか。」

思いのほか素直に答えた兄に、少々戸惑いながらもしかしと口を開こうとする。だが、その言葉は彼方によって阻まれた。

「自信でもなくしたか、竜沃」

久々に兄の口から紡がれた自分の名。懐かしく、嬉しかった。だが、どこか拍子抜けでもあった。

いつも何を考えているのか分からぬ兄に、馬鹿といわれ、考えていることが分からぬといわれ、そして名前を呼ばれた。

どこか、拍子抜けだった。

「いや、なんとなく聞いただけだ。それで、何のようだ」

「あ？・・・ああ。いや、落ち込んでるかと思つてな」

「やる気満々だ。・・・明日あたり動く」

「そうか。まあ、あいつ以外友と呼べるやつはいないからな」

「兄上、失礼なことを言わないでもらいたい」

ぶすつとして言うと、彼方は口端を上げてにやりと笑った。そして、しまったと思つたときにはもう遅く部屋に鈍い音が響いた。彼方に殴られたのだ。

「お前が一番礼儀を知らんだ。失礼などといえた身ではなかつた。傍から見れば軽く小突いただけのだが、これがなかなか痛いのだ。何せ、手加減なしで兄に殴られたのだ。」

殴られた場所を抱えたまま、兄を睨みつける。

「明日は礼儀などいらんと言つて殴りこみに行くくせにいらんことを言うからだ」

そう言つて彼方は窓から出て行つた。

「兄上、いい加減玄関の場所くらい覚えてくれ！」

竜沃がそう叫ぶと、くつくつと笑いながらわかっているくせに、と呟き片手を上げて口を開く。

「俺の玄関はそこだ」

竜沃は兄が窓から入つてくると理解しているから安心していられるのだ。分かつていても、我ながら子供だと思つたもの、兄にかまつてほしいのだ。小さく俺もまだ子供だな、と呟き苦笑する。そうしてもう一度兄の背に視線を戻し、窓を閉める。

「開けたら閉めてもらいたいものだな」

と、呟きながら。

月の綺麗な、雲ひとつない空が印象的な夜。

「いい夜だ。・・荒れるがな」

彼らはそつと自分たちの場所を離れた。

竜沃りゅういついの後ろには妖がついてくる。だが、その中に一匹・いや、一人納得にゅうとくのいかないという顔をした妖がいる。

雷獣らいじゅうだ。昨夜、主に檄を飛ばしたのは別の妖だが、彼もまた納得にゅうとくではないのだ。そのため、もう一人の妖、雨女あめおんなは屋敷で待機している。

竜沃は、軽く溜息をついて振り返る。

「そんなに嫌ならついてこなくてもいいぞ」

ぶすくれた顔をしていた妖はぱつと顔を上げ目を見開いた。後ろを向いているのに、自分の顔を見たようなことをいえる主に後ろに目がついているのではないかと本気で疑ったほどだ。

しかし先ほどまでふてくされていた妖は、主には負けるなと小さく自嘲し、にやりと笑った。

「嫌などとは言っておらん。それに、私が行かなくて困るのは主だ」
竜沃とて、後ろに目があるわけではない。わかるのだ、何となく。

いつも近くに居て、近くに気配を感じているからこそ。だからこそ、後ろに居ても妖の表情が手に取るように分かる。竜沃と対等に口を利ける妖は彼が許している限りでは二人だけだ。彼、雷獣と、夜七のみ。夜七は二人の時以外なかなか普通には喋らないのだが。

後ろに妖の気配を感じながらくすりと笑うと、妖は困ったように言う。

「普通は気配などでは分からんのだがな」

「さて、普通とはどんなものだったか」

悪びれもせずさらりと言っただけ。すると、上から声が降ってきた。

「とんだ男よのう」

先ほどまでの和やかな夜の気配とはうってちがったぴりぴりとした緊張感が周りを包む。ふっと顔を上げると、やはり見覚えのある顔が屋根からのぞいていた。夜七やしちを横につれて立っているのは、影武者ではなく北の領主。だが、やはり体のうちからざわざわと湧き上がる何かは変わらない。

それぞれ体制を整え構えている妖達を片手を上げて制し、領主を見上げた顔はそのままに目だけで夜七を見る。

「自分で抜け出せたものを・・・何故来た」

「いや、少々気になることがあつてな」

久々の敬語ではない喋り方に、つい口元が綻ぶ。気になること、という言葉に顔をしかめる夜七に少し厄介でなと言い北の領主に視線を戻す。

その視線を追った夜七はまさかとでも言いたげな顔を竜沃に向ける。竜沃の背を見ている妖達にはまだ分からぬものの、この場では少なくとも三人が状況を把握している。竜沃と夜七はもちろんのこと、彼の左に立っている雷獣もその中に入っている。

やはりまだ緊張感が漂う中、北の領主だけがこの様子を楽しげに見ていた。

「よくできた下僕だな」

言つて領主は微かに微笑んだ。竜沃のような者にとって妖達は下僕というものでないため、少々理解に困るが簡単に言えば下僕といえる働きをしている。妖は主には逆らえないのだ。たとえ自分の友と呼べるものだろうと、主の命令には逆らえない。

「生憎、俺にとっては下僕ではないのでな」

彼がそう言えば、妖は呆れたように笑う。

「だから普通ではないと言われるんだ」

妖に呆れた視線を送られ、ふと屋根の上を見れば領主は無防備にもあくびをしていた。

「それでは、そろそろ始めますかね。北の領主・・・いや、黒妖の

「親分か？」

四

先ほどまで蒼く輝いていた月はいつの間にもやら赤に変わり、辺りを不吉な色に染め上げていた。

「どいている、貴様等まで巻き込むぞ」

足元にたむろしていた黒妖くろまけにそう言つと、慌あわててその場から退いていく。

いくら彼らが黒妖だとしても、関係の無い者まで巻き込むわけにはいかない。

もともと鬼は、主が倒れば解散する、又は新しい主を探すということになつてゐる。だが、黒妖に取り付かれてゐるため例え中身が主でないとしても彼が立つてゐる限り鬼は解散することも新しい主を探すこともできない。

「わしには神が付いてゐる。いや、わしが神だ。ぬしなどに負けるはずが無い！」

「あまり自分を過信しすぎると自滅するぞ」

「お前が神だつたら世も末だな」

「俺は人類をやめる。お前なんか崇めたくないんでな」

一番右から、雷獸らいじゅう、夜七ちしち、竜沃りゅうわくの台詞だ。

何故か緊張感の無い雰囲気ふんいきが漂う。追い詰められるところも笑えてくるものなのか。緊張感が漂いピリピリとしてゐるうちはまだいいしかし、それを超すとどうもふわふわしてならない。

「まあ、此処であつたが百年目つてとこか。とりあえず、お前は此処で討たせてもらおう」

そう言つて腰に差した刀を抜く。刀を向けた先に目を向ければ、やはり不適ふていに笑う黒妖が立つてゐる。いや、この状態に雪崩れ込んだ黒妖は化け物と言いふべきだろうか。

「やだねえ、仮にも知り合あいを斬るなんて」

そう言つと、目の前の化け物はくつくつと笑いながら刀を抜く。

「お前なら何のためらいも無くきると思っていたのだが、やはり人間か」

「心外だな。俺はお前のような化け物と同類だと思われてたのか」目を合わせて、ニヤリと笑う。そして、ほぼ同時に地をけり相手に向けて刀を突きつける。見ている妖には、どうも楽しんでいるようにしか思えない光景だった。しかし、止まったときしか顔は見えない上に、まったくと言っていいほど音がしない。

「いやあ、何か抜けてるよな」
言っただけほけと笑う雷獣に、夜七は意味が分からないという風な顔を向ける。

「お前が攫われた時、あ、しか言わなかったからな。それに・・・さつさと片付ければいいものを」

先ほどまで楽しそうに歪めていた口元をすつと引き締め、腕組みをしながら不満そうに目を細める。すると夜七は、口端を上げてにやりと笑いこぼした。

「・・・そういう性分だ、あいつは」

「そうだったな。まったく、面倒くさい男だ」

楽しそうに笑う二人をよそに、竜沃はどうしたものかと考えていた。北の領主と仲がいいと噂があった女中らしき女が、屋敷の壁の影に隠れてみているのだ。しかも、恐怖に引きつった顔というよりは、大切なものを壊されるかもしれないという不安に満ちた顔だった。

「まったく、困ったものだ」

女中のほうに目をやっているものの、竜沃のほうを押している。竜沃は溜息をつき、ピタリととまると目を閉じた。

愚かなことに、黒妖は畏だとも気づかずに向かってくる。

「愚かな！」

その勢いは止まることなく増していき、竜沃の耳に風を切る刃の音が聞こえる。まがまがしい殺気と、恐ろしいほどの狂気を肌と感じた。その気配を一番間近に感じた時、彼は月の光を刀に反射させる。怯んだ、そう感じた。目にはあまりしつかりと見えなかったが、本

能だろっか、直感した。

「御免」

小さく言って、刀を振るう。手に、水を切ったような感触を感じる。血だ。もちろん、刀にはずっしりとした重みを感じた。ただ、血しぶきを浴び振るった手に、いやにさらりとした感触が伝ったのだ。眉間にしわを寄せつつも、先ほど見た女中の事が気になり、微かな気配を探す。屋敷の残骸が目には痛い、女中のわずかな気配を辿れば、彼女は門の隅で震えている。

「主、あの女は・・・」

何か言いたげな妖を片手を上げて制し、女中へと向かい歩いて行く。竜沃に気づいたのか、女中はびくりと肩を震わせ怯えたような顔を上げる。軽く微笑んで敵じゃないと示してみるものの、彼女はなおも拒絶しようとする。

「人殺し・・・近づくな、人殺し！」

女は今にも掴みかかりそうな勢いで、何かを叫んでいる。ヒステリックに泣き叫ぶ女中に、二人の妖が同時に抗議の声を上げる。

「主に何という無礼を・・・下がれ女！」

「いい・・・お前、この男の屋敷のものだな。よく聞け」

そうなるべく優しく言い、方膝を付き話し出す。

「主、膝を付くなど・・・」

「お前の主はとっくに死んでいる。今までこの男に入っていたのはただの妖だ」

女中は、これを聞いてもなお竜沃の衣を掴み、憎しみに歪んだ顔でヒステリックに喚きたてている。女中を止めようと四苦八苦している夜七と、主を諦めさせようと横で声をかけ続ける雷獣を一睨みして、そのまま立ち上がる。

「俺はこれで失礼させてもらう」

身を翻し、軽く頭を下げて足を踏み出す。すると、後ろから微かな殺気を感じる。振り返れば、かんざしを手によるよるところらに向かつてくる女中の姿が目に入った。しかし、さすがに妖を従える鬼

と女中の差。竜沃は簡単にかんざしを持った手を掴み、軽く力をこめてかんざしを落とさせる。動かなくなった女中の腕を放せば、女中は落としたかんざしはそのままに走り去っていった。

「・・・つまり、これで償えと」

「主」

よからぬ事を考えているように思ったのか、傍らに立っていた妖が声を上げる。しかし、竜沃は歩きながらそのかんざしを後ろに投げ捨てた。

「まあ、俺はここで生きていくさ」

にやりと笑い妖を見やれば、困ったように笑い口を開く。

「困った主だな。それで・・・お前、また他の妖に反感を買ったのか」
夜七のあきれたような視線を受けて、竜沃は頭を押さえて雷獣を見る。

「お前なあ。あれほど夜七にはいくなと言ったのに」

「目で訴えられても俺にはわからん。どうせお前は敵を騙すにはま
ず見方からとか言うんだろう」

見透かしたようにそう言われ、不満そうに妖を見れば堪えるようにくつくつと笑っていた。

「わーらーうーなあ！」

この様子を見ると、どうも竜沃が子供らしく見える。実際まだ若いのだが、駄々をこねるような年頃でもない。

「餓鬼」

妖二人にそう言われ、さらに不満げに目を細めた。

四（後書き）

毎日更新していきます

五

北の鬼は、主がいなくなつたため解散した。

しかし、妖の中には竜沃りゅうつゐについていくと名乗りを上げるものもいた。そのため、あの日から丸二日西の鬼の屋敷はごたついている。

竜沃が前に立てば、横に二人の妖がつき目の前には妖が広がる。彼らを見据えて竜沃が口を開く。

「お前等、俺の為に命を捨てる覚悟はあるか」

言えば妖達は、頷く者、そこまではと口をつぐむもの、様々な声上がる。しかし、そんな様子を竜沃の横につく妖二人はあきれたような顔で見ている。

「今肯定の意を示したものはすぐに立ち去れ」

彼がそう言った瞬間、妖たちの中に何故だと喚きたてるものが多発した。

「俺は綺麗ごとなど言わない。守りたいものがあるなら命を捨てても守ればいい。死にたいように死ね。ただし、俺を守ろうとはしなくていい。俺のために死ぬなど愚かなことをするな」

この言葉で去つていったのは三分の一程度、残り三分の二はじつと竜沃を見つめたままだ。

「よし、お前等は今日からこの西で働け」

「お前は何でそう主らしくない・・・」

「そう言つてやるな。こいつの一番嫌いなのはお前の小言だ、夜七」
雷獣がそう言えば、夜七は苦虫を噛み潰したような顔をする。そんな夜七を横に、竜沃は満足そうに妖達を見ていた。

妖達に一旦解散を告げた後、夜七の小言を聞きつつ竜沃は部屋に向かった。

「おう、帰つてたか」

襖を開ければ、見慣れた顔があつた。窓が開いていることから、また窓から侵入したのだと悟る。

「まだ頭はなおらんのか、そこは窓だ兄上」

「まことに残念なことにそれを理解してきている」

「それは困った。ここが玄関に見えるとは」

「お前、いい加減切り替えなきやその減らず口ぶった切るぞ」

「わざとだ」

まったく物騒な会話がいきなり始まったものの、日常的に繰り返されるものなので妖二人は気に止めない。

「で、今日はいったい何のようで？」

竜沃が口端を上げてそう言えば、彼方は畳に胡坐をかいたまま口を開く。

「ああ、これ渡しにな」

そう言つて、彼方は一枚の紙切れを懐から取り出し、竜沃に手渡した。竜沃は面倒くさそうにその紙切れを開く。その紙には、短い分が二行書かれていた。読めば、竜沃の眉間にしわが増える。

「またろくでもないものですか」

「どうせくだらんもんだらう、捨てておけ」

横にいた妖は、その様子を不審そうに見つめつつ言った。しかし、竜沃は止まったままで動こうとはしない。まさか屋敷を騒がすほどの文でも書いてあつたのかと覗き込めば、思わず不快そうに眉が寄せられる。その瞬間、竜沃と彼方の口元に笑みが浮かべられた。そして、竜沃は楽しそうに口を開く。

「兄上、見学にでも来られますか」

「是非」

何故か丁寧な言葉遣いになった二人を、妖は不満そうに見る。

「まさか、受けるつもりですか。まったく楽しそうに・・・」

「売られた喧嘩は買う主義でな」

妖が不満げな顔をする理由は、その手紙にあつた。手紙には、果たし状らしき文が書いてあつたのだ。しかし、差出人の名前は書いていない。そんな手紙だということにも関わらず、自分の主はそれを受けようとしているのだ。いくら主とはいえ、彼らが不満そうな態度を

とるのも無理は無いだらう。

「だが、お前は・・・」

「そろそろ気づけ雷獣。こいつが聞くわけ無かるう」

呆れ果てたように言う夜七に、雷獣と彼方は苦笑をこぼす。一方の竜沃は、未だに楽しそうに笑っていた。

そしてその夜、竜沃は兄と妖二人を引きつれ待ち合わせの場所へ向かった。

「お前か」

柳の木に近寄れば、果たし状を書いた犯人らしき男が立っていた。顔を見れば、見慣れた顔が月の光によつて照らされる。

それは、先日倒したはずの男の顔だった。しかし、黒妖らしき気配は感じられない。むしろ、懐かしさを感じさせる気配のほうが大きく感じるほどだ。何度見ても、やはり北の領主である男の顔。

「悪いな、死んではいなかったようだ」

「そうか」

なるほど、彼は乗っ取られていただけらしいことが、男の口ぶりから読み取る。

しかし、彼から感じるのは懐かしさだけではなく強い殺気も感じる。

「ほう、俺は一生直らんと思っただがな」

「お前もまだまだ青臭かったのだな」

そう言うと、彼は驚くほどの勢いで切りかかってきた。さしもの竜沃も、彼の変貌振りに押され気味だ。だが、それだけではない。彼は、竜沃が今まで戦ったことのある人間の中で一番二番を争うほどに強かった。一番目は、兄の彼方。二番目は、人間ではなく妖だ。どうもこいつは、一筋縄ではいかないらしい。

「おいおい、こりやまずかねえか？」

少々危ない空気を感じ取り、彼方は声を上げた。しかし、その時にはもう遅く竜沃は肩から腹部にかけて一太刀されていた。一瞬でそれを理解するには難しく、彼方と妖は暫くの間止まっていた。

「・・・っ!」

竜沃の小さなうめき声で、やっと我に返った三人は慌てて彼に駆け寄った。だが、最初から殺す気だった相手が生きていてしかも仲間が彼を救おうとしているならなおの事、北の領主は先ほどと同じように切りかかる。しかし、彼の刀が竜沃に届くことは無く彼方と二人の妖によって阻まれた。

「悪いな、これでも可愛い弟なんぞでな。返してもらおう」

「主を守るのが俺らの使命だ。それに、生憎俺らが守りたいものは主しかいなくてな」

そう言つて不適に笑む妖と彼方を、北の領主は不快そうに睨んでいた。

舌打ちを残して北の領主が去った後、彼方の腕の中の竜沃が目を開け立ち上がる。

「馬鹿、大人しくしておけ」

いつもよりも厳しめの彼方の声が響くが、それに答えた竜沃の声は何故かとても飄々としたものだった。

「怪我はしていない。心配はいらん」

「だが・・・！」

再び妖が止めようと声を上げると、竜沃の懐から何かが零れ落ちた。真っ赤な、何か。怪我はしてないで済むような傷ではない。そう言おうとした彼方と妖には、その真っ赤な物体は目に痛いものだった。

「トマト・・・？」

そう、トマトだ。竜沃の懐からは、切れたものや無傷なもの、様々なトマトが溢れんばかりに（溢れているが）詰め込まれていたのだ。口を開けたまま立っつていれば、竜沃がにやりと笑い口を開く。

「間抜けな顔だな。・・兄上、可愛くないという言葉は何処へ？」

「お前、それどこから持つてきやがった」

「市場で少しな。そんなに人数がいらないというのにやけに多かったんで拝借してきたまでだ」

「・・・つまりなんだ、盗んだのか」

「金はある」

「置いてきたのか」

「まさか」

彼らの会話からすると、嫌でも金を払ってきていないことが分かる。まあ、鬼として働いているため少しはただで受け取るものもあるが、いくら鬼とはいえさすがにこの量を持ち出すのはまずいだろう。

「あそこの市のじじいはボケているから心配はいらん」

「・・・あのじじいなら大丈夫かもな」

どうも納得がいかないものの、竜沃の一言で彼方は押し黙る。しかし、ある紙を見つけ再び口を開く。

「おい、また言伝があるらしいぞ」

何か複雑そうな顔をした彼方の顔が目映る。彼方は二つ折りにしてあつた紙を開き、何故かきよとんとした顔をした後文を読み上げた。

「北の大地を治めるのを降りる。北より黒妖が出るだろう。東、西、南を治める鬼にこれを止めることを望む」

彼方と同じように、妖と竜沃は拍子抜けだと溜息をつく。

しかし、そうゆっくりとはしてられない。夜が明ければ、また一仕事しなくてはならない。その前に、少しでも睡眠をとりたいのだ。

「あ、朝・・・」

だが、彼らの思いもむなく屋敷につくころには夜が明けていた。

互いの顔を見合わせて、しかたないと溜息を一つつく。竜沃は面倒くさそうに眉を寄せて、妖たちに命令を下す。彼の場合、頼みといったほうが正しいかも知れぬが。

「北とここ以外の鬼を呼んでくれ」

そう言えば、目の前にいた妖たちはそれぞれに飛び去っていく。その様子を、彼方は眠たそうに見ていた。

六

東、南の鬼は急遽、竜沃の頼みによって集まっていた。

「一斉集合なんて、何かあったんですかい？」

言ってそれぞれの領主をぐるりと見渡したのは、一番年上の東の領主、黒鈴だ。

黒鈴はキセルを指の間でくるくると回しながら、もう一度それぞれの顔を見渡した。

「また面倒ごとでも押し付けるつもりじゃねえだろうなあ」

竜沃を見据えてそう言ったのは、最年少の鬼助^{きすけ}。こう見ると、やけに年の差がはつきりした三人である。そんなことをつらつら考えていると、黒鈴の声が響いた。

「で、どうなんだい。お前さんが呼ぶってことは、またなんかあるんで御座んしょ？」

彼が振り返ると、溜息をつく寸前といった感じの二人の顔が目に入った。

「北がつぶれる。それで、黒妖が出るらしくてな。今回貧乏くじを引くのは誰かねえ」「」

「そんな事だろうと思っておりました」

「俺は自分のところで精一杯だぞ」

仏頂面で返す鬼助に、竜沃は楽しそうに声をかける。

「嘘は良くないぞ、餓鬼」

「・・・焼くぞてめえ」

相変わらずの鬼助の頭に手を伸ばし、わしわしと撫でながら言えば彼は不満そうに口を開いた。しかし、その後鬼助が口をぱっかりと開けパクパクと何か言おうとしている。もちろん、後ろに目がついているわけでもない竜沃には何故だか分からぬ。怪訝そうに彼を見やり後ろを振り向こうとして、やっとこさ彼の言わんとすることが分かった。

「いつ……！」

そう、竜沃の後ろには彼方が立っていた。その手を握ったまま。

「どこの誰が餓鬼だ。お前は悪ふざけがすぎる。危ない目にあつてふざけて終わりでは説明がつかんだらうが。……もういい、とつとと寝ろ」

そう言つて、自分の背中を押した兄に何ともいえぬ感情が溢れ出す。

「今日は部屋で休んでくれ」

そのまま妖達に部屋を案内するように言い渡して、屋根に上る。暫くすれば、妖二人の気配が上がってくる。未だにしわを寄せたままの眉間を気にも留めず、竜沃は振り返る。

「どうかしたか」

「いや」

きよんとした顔でこちらを見ている妖にそう答えれば、何か勘ぐつたよ様な様子で夜七が声を上げる。

「兄方か」

その問いに無言で返せば、妖の不機嫌そうな声が響く。

「……あの戯け！」

あれほど言つたのにこの結果とは、本当にもう、どうしてくれようか。夜七は、竜沃に聞こえぬように小さく呟いた。

あれほど言つたのに、というのには、少々事情がある。実は、この妖二人と彼方は以前三人で少しばかり話をしていたので。

「まったく困つた弟をもつた」

「我が主をあまり苛めてくれるなといったはずだ、兄方」

「あれでいてなかなか打たれ弱いからな」

「いやあ、いい友を持ったな。はっはっは」

『爽やかに笑つてる場合じゃないだらう』

襖を開けて部屋に入り込めば、不思議そうな顔をした彼方が立っていた。彼に文句を言つと、ほけほけと笑つて返された。分かつているのかいないのか、どうもつかめない男だ。

一方の竜沃は、未だに屋根の上で月を眺めていた。

「あれは、兄上と食おうと思っていたんだがなあ」

竜沃がまだ幼い頃、東洋の食べ物はとて珍しいものであった。今でこそそこまで高くは無いものの、値段もそれ相応の高さだった。

竜沃は、それを小遣いを貯めて買い、兄と食べたことがあった。まあ、拝借したのは確かだが、兄と食べようと思っていたことに嘘は無い。もう忘れたか、と一人呟くと、何かの気配を感じた気がした。そのまま何をすることもなく月を見上げていれば、ふいに聞き覚えのある冷たい声が響いた。

「なあ、俺が手をかそうか？あいつ、邪魔なんだろう？」

いきなりのことに体をびくりと震わせ、ふと気がつく。ざわりと血が騒ぐ。姿は、見えない。だが、この血が騒ぐということは相手が黒妖だということは確かだ。竜沃は、先ほどの声に違和感を持った。この台詞は、五年前と同じ台詞だ。未だに姿を見せない黒妖の気配を探っていると、少し離れた葦の屋根から黒い人影を認めた。黒妖とて、強くなれば人型をとる。これは厄介なと眉をひそめ、小さく舌打ちをする。しかし、いくら思い起こしてみても五年前のことを思い出すことはどうもできない。思い出そうとすると、頭が真っ白になるのだ。ただ、この黒妖に何かをされたのは確かで、知らぬうちに拳を握り締めていた。何とも言えぬ感情が渦巻いて、竜沃は今すぐにも近づいて行って鬪り殺してやりたくて仕方なかった。とにかく、この黒妖を遠ざけたいのだ。できるだけ早く、この手でと思い、刀に手をかける。だが、近づいてはいけなないとどこかで警報が鳴っている。声を荒げそうになり、ふつつつと湧き上がる怒りを押し殺して立ち上がる。

「失せる。貴様に用は無い」

今までに発したことの無いような、地に這うような低い声で言い放った竜沃からは、これでもかというほど激しく荒々しい殺気がたっていた。そういったものを何とかやり過ぎし、そう言って彼に背を向ければ、さつきまで遠くに感じていた気配を背後に感じた。

「二度としない・・・ってかあ？無駄だ。一度やったらもう終わりだ

あ。よく見るよ、お前の手。ほら、きたねえなあ」

彼がそう言つと、ふと手にぬるりとした感触を感じる。目を落とすと、見えたのは赤い血。それも、人間の血だ。竜沃には、それが本能で分かる。彼は人間なのだと言つてしまえばそれでお終いなのだが。

「・・・つやめろ！俺は、俺は覚えていない」

震える声でそれだけ言つと、頼りない自分の声とは裏腹にやけに冷たい声が響いた。

「覚えてない・・・？そうか、そうだよなあ。でもよお、覚えてないじゃすまねえだろ？」

ついと前に出て、竜沃の顔を覗き込む。彼は、にやりと笑つて人差し指を竜沃の額に当てると、それをそのまま押し付け楽しそうに言い放つた。

「お前は、自分で家を潰したんだからさあ」

七

やっと、思い出した。あの夜起こったことを。

「なあ、俺が手をかそうか？あいつ、邪魔なんだろう？」

耳元で囁かれた言葉。蘇る記憶。嫌に耳に付く、低い掠れた声。

目を開くと、あの日と同じ光景が広がっていた。青く輝く満月が、竜沃を見下ろしていた。

「おい、ここから出せ」

少し遠い位置に立っている影が一つ。見覚えのある黒妖の姿だ。黒妖は、怪しい笑いを浮かべて、こう言った。

「今のお前は未来のお前か。ここに居るのは皆、過去の者だ。まあ、時期に馴れるだろう。じっくり思い出せよ、お前の過去をさあ」

黒妖は、そう言うとおつという間に消え去った。

今が過去だとすると、あの黒妖は未来の者が過去の者か。今の自分が未来の自分ならば、過去の過ちを正すことはできるのだろうか。

だが、今の自分では自分が何をしたのかをすっかり分からない。その上、その確信はもしかすると、というだけのもので、それを確かめる術を彼は知らない。ふいに、懐かしい声すべが響いた。

「何をしておる、はやく降りて来て仕事をせんか」

「父上・・・」

声を聞きたび、少しずつ、記憶が戻っていく。そう、竜沃はこの屋敷の主の息子だった。兄と二人、よくこき使われたものだ。だが、どうもこの屋敷のやり方は竜沃には合わなかった。いちいち、勉強、勉強、次は仕事だ、この書類はこのものだ、やれこの文字が間違っているのだと、どうも忙しくて気に食わぬ。正直、いつそのことこの屋敷ごと壊してしまおうかと思ったことは幾度もある。このときだ、あの声が響いたのは。

「なあ、俺が手をかそうか？あいつ、邪魔なんだろう？」

後ろからの声だった。振り向くと、あの黒妖が立っていた。気づけ

ば、自然と額に汗をかいていた。

即座に、断ろうと思った。否、断れると思っていた。だが、仮にもこれは自分の過去を思い出すために与えられた夢。つまり、もう起こったことを見せているものだという事だ。断ることはおろか、黙ることすら許されず、ついにはその問いに肯定の意を示してしまった。あの日と同じように。

「・・・」

もちろん、口で是と答えたわけではない。ただ一度、たった一度、首を縦に振っただけなのだ。黒妖は、たったそれだけの竜沃の行為に口端を上げてうつそりと笑った。しまったと思ってもう一度顔を上げて黒妖を探したが、そこにはもうあの影は無かった。不意に出る溜息。知らぬ間に浮かぶ苦い表情。竜沃は音を立って膝をついた。そして、先ほどよりもよりひどい嫌な汗をかいた。

ああ、自分は三度も同じ過ちを繰り返すのか。一度目は、五年前のあの時。父と母、そして自らの仲間までも手にかけてあの時。そして、五年後の今。自分は過去の夢でもまた父と母を殺すのだ。その次にまた、目覚め、止めるものの腕を振り払い兄までも殺すのだ。ああ、なんて汚い、おぞましい男。血に濡れた手、光を映さない漆黒の瞳。己はまた、過ちを犯す。

やがて竜沃が己の手で朽ちようとしたとき、暗い夜とは場面が変わり、彼の目には血まみれで倒れ伏した父の姿が映った。これもまた己の犯した罪。そう、頭では分かっていたのだが、体は反対にそこから立ち去ろうともがく。汗ばんだ手を握り、目を背ける。

急に、激しい頭痛が竜沃を襲う。あまりの痛みに頭を抱えると、己には見えないものの、額に何かの紋章が浮き上がり白く光った。やがてその光は弱弱い一筋の光となり、消えた。そして、彼の額にあつた紋章も鏡の割れるような音を立てて砕け散った。

竜沃は、あまりの痛さと一気に戻った記憶に声にならない悲鳴を上げた。強く握った手に伸びたつめが食い込み、血が伝う。そっと目を開けると、やはり変わらずに先ほどと同じ姿の父が映った。

「……っ！」

己が手にかけた父、己の父にもかかわらず、竜沃はその光景に身を引いた。それはあまりにも悲惨な光景だった。そして、父の前にひざを着いた。目を瞑っていたとき、彼は元の世界に戻っていることを強く願った。このままおぼろげな記憶のまま、夢から覚めることができたならどれだけいいことか。しかし、所詮は人間。妖の夢を抜けることはかなわなかった。記憶がいきなり戻っただけでも精神が衰弱した状態にあったというのに、記憶よりもリアルに映し出された。これ以上のことがあれば、彼は壊れてしまいそうだった。

父の顔を見ることはままならず、彼は視線を落としたまま涙を流した。何かを伝えたかった。伝えなければならなかった。ごめんなさいと一言、それだけでも伝えようと五年前からどこかで決心していた。それでも、己の思いを伝えようと、これは自分がやったのではないと伝えようと口を開くたび、言葉にならぬ嗚咽がこぼれた。そんな事を何度か繰り返していると、ふいに父の手が上がるのを目の端で捕らえた。ごつごつとした懐かしい手が、彼のほうを撫でた。

先ほどまで流れていた涙が、より大粒のものとなって床を叩く。やがて、人差し指が竜沃の額を捕らえる。そして、父の小さな声が聞こえた。これが、竜沃の額に先ほどまであった紋章だ。しかし、竜沃は記憶を封印しようとする父の手をつかみ、そつと握った。あの日出来なかったことを、この日やっと遂げることが出来た。夢だったはずなのに、どこかにそんな冷静な考えがあったものの、彼はそれに気づくことはできなかった。それでもう、大切な時間を忘れたまま時間が進んでいくことは無いだろう。罪から逃げることはできないだろう。辛い夢を見た。消えぬ罪を再び負った。そして今度はこの汚れた手を忘れ去ることはできない。残酷な過去、残酷な現実。繋がった記憶。今までつぎはぎだった記憶が、すべて繋がった。悲しみや罪悪感、そして何故か喜びまでもが小さな嗚咽となってあふれ出す。だが、竜沃はそのまま動くことも立つこともできなかった。ただ、冷え切った父の手を握り、たった一言を伝えることができた。

かった自分を恨むことしかできなかった。
竜沃は、再度声にならない悲鳴を上げ、暗闇に沈んだ。

あの夜、たった一度だけ父の優しさに触れた気がした。

「……あ……るじ、……主！」

ふと目を開ければ、先ほどまでの光景は嘘のように消えていた。知らぬ間に強張っていた体の力を緩める。自分の頬が濡れているのかわからないのか、竜沃にはまだ分からぬ。ただ、胸の痛みはまだ取れず、未だにあの感情が渦回っている。まだはつきりせぬ頭をふるふると振って緩々と視線を上げると、兄と、信頼する二人の妖の姿が見えた。

「あの、黒妖は……逃がしたか」

黙っているところを見ると凶星らしい。いつもなら、捉えたなと問うはずだ。だが、この状態で捕らえたかなど聞けるはずが無い。みなそろって、竜沃が目覚めるのを待っていたのだから。

黙り込んだままの三人に苦笑する。無理にでも笑っておかねば耐えられなかったのだ。しかし、見る限り彼らの顔色は暗い。

「主、何をされた」

その問いに、竜沃の表情は暗く沈みかえり、気づかぬ間に握っていた手をさらに強く握り締める。

「……」

「ひどくうなされていた。それと、手が……穢れていると、何度も」

竜沃は、依然喋ろうとはしない。部屋に沈黙が広がり、耐えかねたように彼方が口を開く。

「俺は面倒なのはごめんだ。どうせ今でも辛いなら、あえて聞かせてもらおう。……思い出したか、あの夜を」

兄の声を、久しぶりに聞いたような気がした。変に探られるより、彼方のように率直に聞いてくれたほうがいっそすがすがしい。ただ、その率直さが竜沃には少し痛かった。だが、彼方の目は鋭く細めら

れ強い光を放っている。

竜沃が言葉に詰まっていると、急に襖が開き、雨女が駆け込んできた。

「ご無事ですか、主！」

形のいい眉を歪め、今にも泣き出しそうな勢いの雨女に、竜沃は少々戸惑う。無事かなどと聞かれても、ただ夢を見ていただけである。まあ、確かに悪い夢ではあったが決して危険な目にあっただけではないのだから。それに、雨女とは夜七が攫われた夜以来一度たりとも口を利いていなかったはずだ。彼女がこんな簡単に話しかけてくるはずが無い。大丈夫だと告げてもおろおろ落ち着かない雨女の様子に、何かあったなと示しをつけて妖を見やる。

「お前、また何か余分なことでも言ったのか」

「別に。ただお前が黒妖に襲われて倒れてまだ起きない、と言っただけだ」

「それは、黒妖に襲われて（術をかけられたから）倒れてまだ（夢を見ているから）起きない、の間違いだろう」

「嘘はついておらん。短くまとめただけだ。・・あまりかわらんだろう」

おおいに変わる。前者と後者では危険性からしてかなりの差が出てくるはずだ。

「必要な部分を省略してどうする」

まったくもって、困った妖だ。本来、妖は人を化かすものでもあるから、文句は言えないのだが。しかし、化かすといってもそんなものに化かされるのは人間^{ひと}だけだ。今の状況は、妖が妖に騙されたという方が賢明だろう。

「では、ではご無事なのですね？」

「ああ、何とも無い」

言って軽く笑えば、先ほどまでおろおろと落ち着きが無かった雨女は気が抜けたように座り込んだ。そうして数分がたち、ふっと雨女が姿勢を正した。何事かと思いい口を開こうとすると、それよりも早

く雨女が喋りだす。

「あの黒妖は、昔行方知れずになった男の体です。今の名を、松長正十郎と」

「あの男、確か見えないものは信じぬとって……」

「そこを逆手にとられたのです」

雨女は険しい表情で語り始めた。

九

松長は変わった男だったそうです。もちろん、何が悪いというわけでもなかったのです。人当たりはいいし、商売も上手い、決して博打はしないし、それに酒は飲んでも酔うほどの付き合いはしない。どちらかというと、周りからは好ましいという声がよく聞こえていました。

でも、彼は鬼を嫌っていました。他の鬼はもちろん、ここ西の鬼は特に自分の妖を見せることはしませんでしたね。その為、目に見えないものを信じない主義の彼にはかなり嫌われていたようです。

ただ、ここを守っているのは西の鬼でしょうか？

はい。そう、世話になったという人も多かったのです。だから、彼が鬼を批判するようなことを言うたびに、だんだんと評判が悪くなったのです。少々とばしますが、彼は目が・・・。

そう、彼の目が見えなくなったのはご存知でしたね。それは、ただの事故で通されているようですね。ええ、お察しの通り事故ではないのです。彼は、目を潰されたのです。ああ、いいえ、物理的にではないのです。誰かは分かりませんが、ちょうど彼が店を出たときに・・・すみません、そこで起こったことは私には掴めませんでした。ただ、その経路は確かです。

ええ、彼は目に見えないものは信じません。はい、そうです。案の定、彼は自宅から一歩足りとも出なくなりました。ご飯にも手をつけず、けてして誰も近寄らせませんでした。そうして三日がたち、彼は飲まず食わずでひどく痩せこけていました。そこに、あの黒妖が現れたのです。

「なあ、見えるようにしてやろうか」

黒妖は彼にそういったようです。もちろん、目が見えなくなった彼は見えない黒妖にひどく脅えました。音も無く入ってきた黒妖に人間とは違うものを感じたのでしょうか。彼は、黒妖を拒むため、恐怖

から逃れるために家のものを呼びました。しかし、すべてを遠ざけたのは彼自身です。まさか残って見張りをしている人はいないでしょう。誰も彼のもとに駆けつける者はいませんでした。

黒妖は、彼の手首をつかみ自分の手とあわせてこう言いました。

「ほら、平気で嘔吐く人間より醜くて浅ましい妖の方がよっぽど信用できるだろう?」

と。それと、妖だといっても姿は人間と変わらないから安心しろと彼は、それでもひどく脅え逃げ惑いました。でも、彼は目が見えないため様々なものにぶつかり、三日間飲まず食わずでいた体ではそれ以上動けないほどになっていました。

「痛いだろう、怖いだろう?そんな目じゃなあーんも見えやしないんだよ。だから見えるようにしてやるうって言ってるんじゃないかあ」

黒妖のこの言葉に乗せられて、彼は黒妖の手をとりました。けれど、これは罠でした。ええ、目が見えないことに苦労していた彼にはその言葉に違和感を覚えることは難しかったのです。何の疑いも無く黒妖の手をとりました。その為に、彼は命を落としました。

ええ、確かに彼は目を見えるようにしてやるといいました。でも、彼の目は確かに見えるようになったのです。体は確かに黒妖の物となりましたが、魂が抜けたといっても彼の体です。中身が変わってしまっても見えるようになったことには代わりが無いのです。次の日、彼の姿は忽然と消えていました。それも、微量の血痕を残したまま。お分かりでしょうが、あの出来事を見ていたものはいなかったのです。その為、彼が消えたということはあまりにも突然すぎたかなりの騒ぎになりました。しかし、彼の屍はいつまでたっても見つからない。だから、その事件も噂も時がたつにつれて薄れていったのです。結局、彼のことは皆忘れ去ってしまいました。人間は皆そのようなものです。どうせ時がたてばすべて忘れてしまう。薄情な生き物です。ああ、愚痴になってしまいましたね。すみません。

九（後書き）

わわっ、更新するの忘れてた・・・

それで今、彼の魂はどこにあるのか。そんな竜沃の問いに雨女はこう答えた。

「今、天狗が出向いていります。彼が余分なことさえしなければ、無事に送り届けてくれるでしょう」

送るとは、黄泉の国に送り届けるということだ。雨女はあくまでも余分なことさえしなければ、という言葉を強調した。天狗は自分に対する態度が気に入らなければ、放り出すこともしばしばあった。

現に過去に何人も客人が天狗によって屋敷から締め出されている。「目は見えているのか」

見えていなければ、黄泉の国にわたる事はおろか、その前に迷ってしまうだろう。

「問題はありません。今の体の目が見えていれば、彼の目は必然的に見えるようになります」

雨女は微笑しながらそう言った。だが、目に見えないものを信じない彼にとって、急に信じていなかった妖類が出てきては混乱するだろう。竜沃は、さてどうしようかと思案する。

「雷獣くらいなら、追いつけると思うか」

夜七はできることなら傍に置いておきたい。雷獣も居られるのなら居てほしいのだが、天狗に追いつける妖といえば夜七か雷獣くらいのものだ。

「ええ、天狗はまだ探しながら飛び回っているようですから」

妖は自分の仲間ならば、場所くらいは察知することができる。ふむ、便利なものだとは呟いて、雷獣を近くに呼ぶ。雷獣は、先ほどまで寝ていたのか眠たそうに目をこすりながら歩いてきた。

「眠いか・・・？」

「いや、問題ない」

長いあくびを一つして、すまなそうに問う竜沃に軽く返す。

「今から天狗を追ってくれんか」

「伝言か」

「ああ、目に見えんものは信じない主義の奴だから・・・多少の無礼は許してやれと言っておいてくれ」

すまん、と付け足して立ち上がった竜沃に慌てて雨女と夜七が付いていく。しかし、天狗の姿を思い浮かべて少々迷った後、雷獣は竜沃を呼び止めた。

「どこへ行く」

「朝餉でも食いに」

「・・・伝言だが、天狗は多分奴をほうって帰ってくるぞ」

竜沃は、先ほどの問いとはまったく持って関係の無い話を持ち出した雷獣を見返して、何故だと問う。

「多少どころの問題ではないわ。・・・とか言っただけで戻ってくるに違いないと見た」

「・・・よし、無礼は許してやれと言っておけ」

あの敵つい顔をさらに歪めて帰ってくる天狗の姿が安易に想像でき、竜沃は苦笑した。その答えを聞いて、雷獣はすっと立ち上がり朝焼けに向かって消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3322f/>

妖争

2010年10月16日02時32分発行